



全国推計82万人

成人男性の約2%

アルコール依存症

飲酒をやめたくても止められないアルコール依存症の人が推計で国内に82万人いることが、厚生労働省の研究班（班長＝樋口進・国立病院機構久里浜アルコール症センター副院長）が世界保健機関（WHO）の基準に基づき行った、初の全国調査で明らかになった。これまで公式な数値としては厚労省の生着調査しかなく、入院・外来合計で1万7100人（02年10月現在）とみられていた。

厚労省研究班、初の調査

研究班は02年度から3年間にわたり成人の飲酒実態を調べている。対象は全国から無作為に抽出した20歳以上の男女3500人。03年6月に面接調査し、2547人から回答を得た。

「飲酒のためにスポーツ、仕事、あるいは友人や親類とのつきあいをきりめたり、大幅に減らしたりした」

「飲んでいる時に、誤ってけがをしたことが3回以上ある」

「飲酒が原因で不眠、憂うつな気分、神経過敏、幻視、幻聴、他人に対して疑い深くなること、といったような心の問題を経験したことがある」

「こうした17項目のうち、1つにあてはまる場合、依存症と判定した。

依存症の割合は男性1・9%、女性0・1%、全体では0・9%。世代別では70歳代が341人中10人（2・9%）で最

の項目をWHOの国際疾病分類（ICD10）の診断ガイドラインに基づいて6グループに分類。過去1年間に3つ以上のグループにあてはまる場合、依存症と判定した。

「被害にあった」3040万人

アルコール依存症の診断ガイドライン

通常、過去1年間のある期間、次の項目のうち三つ以上の経験があるか、出てきた場合にのみ、依存と確定診断される

- ①飲酒したいという強い欲望あるいは強迫感がある
- ②飲酒の開始、終了、あるいは量に関して行動を統制することが困難
- ③飲酒を中止したり、減らしたりしたときの生理学的離脱症状（禁断症状）
- ④はじめはより少量で得られたアルコールの効果をを得るために、飲酒量をふやさなければならなくなっている
- ⑤飲酒のために、他の楽しみや興味を次第に無視するようになり、飲酒せざるを得ない時間や、飲酒の効果から回復するための時間がかかるようになる
- ⑥明らかに有害な結果が生じているにもかかわらず、依然として飲酒する

ンター（旧国立療養所久里浜病院）はアルコール依存症の治療で全国的に知られる。同病院が作成した、WHOより依存症を幅広くとらえた基準による調査では、依存症が427万人という推計値もある。

も比率が高く、60歳代（0・9％）、50歳代（0・7％）と続く。世代別に依存症割合を人口に掛け、日本全体では推計82万人と推計された。

調査では「暴言・暴行」「飲酒の強要」「セクハラ」など、アルコールによる問題行動の被害者（0・7％）も聞き、飲酒関連の被害者を3040万人と推計。職場の人との飲酒が原因で困った経験のある人は9・5％おり、「うち」から久里浜アルコール症センター（旧国立療養所久里浜病院）はアルコール依存症の治療で全国的に知られる。同病院が作成した、WHOより依存症を幅広くとらえた基準による調査では、依存症が427万人という推計値もある。

研究班では、結果を分析し、今年度までに最終報告書を出す。口班長は「国民は飲酒の功罪の『罪』をきちんと知る必要がある。今回、初めて実態が明らかになったことで、依存症の早期発見・早期治療のプログラム作りにつながるとしている。